

もりたなるお

無名の盾

たて

警察官の二・二六事件

講談社

もりたなるお

無名の盾

たて

警察官の二三六事件

講談社

無名の盾

定価二二〇円

第一刷発行 昭和六十二年一月二十三日
第三刷発行 昭和六十二年五月二十五日

著者 もりたなるお

発行者 野間惟道

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽二―二二二
電話 東京(〇三)九四五―二二(大代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

著丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えます。

© NAKUO MORITA 1987 Printed in Japan

目次

第一章	巡查交替	7
第二章	巡查と兵隊	46
第三章	重臣と警官	69
第四章	天皇と巡查	93
第五章	疑心暗鬼	127
第六章	蹴起部隊出撃	150
第七章	重臣の盾	172
終章		242
あとがき		261

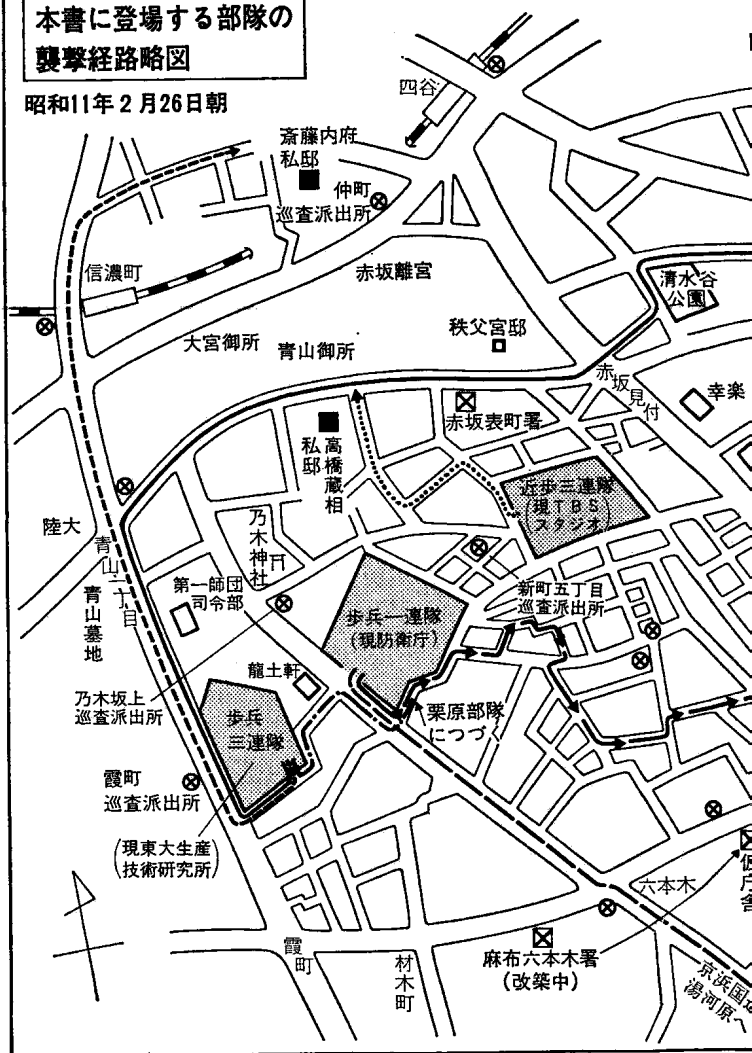
装帧 安彦勝博

無名の盾



本書に登場する部隊の 襲撃経路略図

昭和11年2月26日朝



第一章 巡査交替

一

警視庁警務部警衛課の巡査品川忠雄（三二）は、小さな風呂敷包を抱えて、東海道線湯河原駅に降り、駅前から湯河原温泉行のバスに乗った。

長期滞在に必要な荷物は、チャッキで着くことになっている。海から吹いてくるらしい冷たい風に粉雪が舞っていた。

品川巡査はオーバーの襟を立てて、列車の到着時刻を見合わせて待っていたバスに乗り込んだ。

品川巡査の黒いオーバーの肩にたかった粉雪は、車内の暖い空気に触れてすぐに解けた。座席は半分空いている。

乗客の大半は湯治にいくらしい老人たちで、そのなかに異彩を放っている者が二名。

一人は鬚をゆった女性で、白い襟巻で顔の下半分を隠している。

もう一人は、日本髪の婦人と同席している男で、これはネズミ色の中折帽を被り、黒の二重まわしを着ていた。マスクをしているので風貌はわからない。

二重まわしの合せ目から太いステッキの柄がのぞいていた。

品川巡査が、さりげない一瞥のうちに、車内の模様を見てとったのは、職業がら身につけた技術といつてよい。

バスは短い警笛の発車合図をすると、車体を震わせて動き出した。

品川巡査は、進行方向へ真っ直に顔を向け、口を真一文字に結んでいた。

太い眉とつぶらな瞳をもつ顔は、一途に思いつめる少年のそれに似ている。

オーバーにくるまれた体は、立白のように頑丈に見え、姿勢を正している座席には、土俵へ上がっていく力士の気負いのようなものが感じられた。

バスは駅前通りの商店街を抜けて、藤木川沿いに右側の道を上ぼっていった。

金時娘のような顔をした小柄の車掌が、停留所名を告げる間を使って、簡単な観光案内を喋った。

「湯河原温泉は、いまから千数百年前の奈良朝時代に、温泉場として名が通っておりまして。箱根外輪山の浸食谷から湧き出ます温泉は、石膏を含む食塩泉でございまして、切り創、火傷、婦人病などに特効がございます。湯河原温泉が、箱根、熱海、伊東などとともに発展しますのは、明治時代のなかごろからでございます。鉄道が発達したことで、日清、日露の戦役で負傷された将兵の治療を受け入れましたことで、益々その名が知られるようになったのでございませう。お

待たせを致しました。次は落合橋でございまーす」

品川巡査は、車掌が告げる停留所名から、自分の下りるところを計算した。

湯河原赴任の内示があつてから、十日以上も待ち呆けをくわされた。その間に現地の地理を頭に叩き込んだのである。

護衛警官の移動は、早くて内示の翌日、遅くても三日以内には新しい任務につくのが普通だ。

品川巡査が内示を受けて、十日以上も赴任に手間取ったのは、受け入れる側が前任者との交替を渋ったためである。

雪は次第に本降りになるらしく、車窓にたかる白いものが多くなった。

品川巡査は、これから交替する前任者と、警護対象との、気まずい対面の瞬間を思つて、顔を横に向け、雪に閉される車窓へ視線を凝結させた。

受け入れ側が、警護巡査の交替を渋ったということは、品川巡査もうすうす知っている。

「自分は歓迎されない客らしい」

そうしただけが去来し、品川巡査の心は曇った。

温泉街の中心部に入ると、降雪はいよいよ激しくなった。

品川巡査が降りる藤木橋にバスが止まると、乗客の大半が下車した。

二重まわしを羽織ってマスクをした男と、日本髪の婦人も下りた。

バス停に板囲いの待合所があつて、バスから下りた客がみんなそこへ駆け込んだ。

品川巡査の職業意識は、二重まわしの男を、いつの間にか警戒していた。

他の湯治客とくらべて際立って目立つ存在であるのはいうまでもない。外見の特異さもさるこ

とながら、内面からくる胡散臭さが感じられるのだ。

どこがおかしいというのではなく、第六感にピンとくるものがあるのだ。

待合所にいた湯治客が、それぞれの行き先を喋りながら出ていってしまい、品川巡査と二重まわしの男と連れの女性が残った。

温泉街は、山あいを縫って流れる川に添ってあるため、降りしきる雪が風に巻かれて吹雪の状態になった。

すし詰めになっていた人間が出ていったので、隙間ができた待合所に、風に巻かれた雪が吹き込んだ。

待合所のはす向いに駐在所があり、雪をかぶった建物に赤い電灯がついていて、そこだけが奇妙な色あいの明るさである。

駐在所は、神奈川県小田原警察署湯河原駐在所。

勤務員は神奈川県巡査内海広太郎（五一）で、家族と住んでいる。

品川巡査は、藤木橋のバス停で下りたら、とりあえず駐在所へ顔を出し、簡単な挨拶をし、それから勤務先の牧野別邸にいくつもりだった。

しかし、いまはそれをためらっているのだ。

胡散臭い感じの二重まわしの男が、いつまでも待合所を出ていけないので、駐在所に寄るかどうかを考えていた。

品川巡査が駐在所へいくと、この男は私服の品川巡査の素性を見抜くのではないか……と思ったのだ。

二重まわしと連れの日本髪的女性が動き出した。二人は雪の道をはすかに突っ切り、駐在所の玄関へ辿りついた。

品川巡査は不思議に思い、待合所のなかに立ち尽す格好で、男が駐在所の巡査と話をするのを見ていた。

会話は、降りしきる雪に遮られた感じで聞えない。

駐在所の前を離れた二人連れは、もつれ合いながら下手に歩いていく。

駐在所の巡査は、戸を閉めるときに品川巡査の方をのぞき見たようである。

品川巡査は、駐在所には寄らずに、二人連れを追いながら雪道の右はしを、軒ばつたいに歩いた。

二人連れは駐在所から五十メートルほど下ったところにある旅館へ入った。そこは品川巡査が頭へ叩き込んだ知識によると、伊藤屋旅館のはずだった。

「……………」

軒先へ雪を避ける具合にして立ち、品川巡査は考え込んだ。

伊藤屋旅館……伊藤屋別館。別館は本館と藤木川を隔ててあり、そこには重要人物の牧野伸顕伯爵が、夫人と孫娘をともない、避寒を兼ねて住んでいる。

牧野伸顕伯が、渋谷区神山町の私邸を密かに抜け出して、湯河原町の伊藤屋別館に移っているのを知っているのは関係者だけだ。

内大臣をやめている牧野伸顕伯に、所轄署から警備の警官が差し向けられ、警衛課が警護警官を派遣するのは、前官の礼遇を受けているためだった。

内大臣をやめても、当分の間は現職同様の待遇を受けているのである。

品川巡査の第六感がとらえた胡散臭い人物は、牧野伯が密かに住む別館の……その本館に入つた。

しかも駐在所の巡査と会話をしていた。これはどういふことだろう。

品川巡査は、藤木川のパス停の方へ引き返した。

湯河原駐在所には、着任の挨拶だけするはずだったが、ひとつ用事ができた。

品川巡査は、駐在所の事務所に入り、雪をかぶったオーバーを着たまま、警察手帳を出して身分をいい、牧野伸顯伯爵の身分警護を交替する旨をいった。

「御苦労さまです。本署から連絡がきています。別邸におられる丸山さんからも聞いております。雪がひどくなつてたいへんでしたでしょう」

と駐在所の南海巡査はいった。頭は半白髪で、額に深い横皺があり、頬のこけた痩せ型の巡査である。

「オーバーを脱いで、中で少し休んでいきませんか」

南海巡査がすすめるのを断わり、品川巡査が聞いた。

「いまさっき、ここへ男女の連れがきましたでしょう。男は二重まわしを羽織っていて、女のはうは日本髪を結っている二人連れです」

「はい。きました」

「なにを聞きに寄りましたか」

「旅館の場所です。伊藤屋ですが」

「ただ伊藤屋とだけ聞きましたか」

「いえ。そうではなかったですね。徳大寺公爵が泊っておられる旅館が、この辺にありますかと、そう聞いてきましたね。それですく伊藤屋とわかったので教えてやりました」

「徳大寺公爵というのは」

「お公家さんです」

「重要人物ではないのですね」

「同じお公家さんでも、近衛さんなどとは違うでしょう。本署からも警護対象として特にいつてきてはおりません。伊藤屋の長年の常連客ということで、部屋も年間借りきっているようです」

「豪勢なものですな。ところで先ほどの二人連れですが、牧野閣下のことをいいませんか」

「はい。なんともいいませんでした。もっともそれは聞かれてもいいません。臈口令かんぐちれいが敷かれていますからね。伊藤屋のほうにも、そのことはきつくいつてあります」

「牧野閣下の湯河原滞在は、秘密が保たれているのですか」

「さあ」

「さあというと」

「重要人物ですから警護がつきます。警視庁から派遣される警衛課の警官のほかに、小田原警察署からも特高係と外勤から警官が派遣されて、一日に数回は巡察警戒をします」

「警戒は厳重にしているわけですね」

「まあ……そういうことになります」

内海巡査の答えは曖昧だった。

「外勤は制服でくることもありますから、住民はなんとなく異状を感じる模様です。それと、牧野閣下が散歩好きで、よく外を歩きます」

「それはちょっと困るね。隠密でできているにしては、無神経過ぎますね」

「お偉い方ですから、そういうことは無頓着のようです。お散歩のたびに警戒員と警護員をつけますと、やはり目立ちまして」

「牧野閣下がきていることが知られてしまうわけですか」

「牧野閣下かどうかは知らなくても、誰か重要な人物であるとは思うでしょう」

「散歩のコースはどんな具合ですか」

「別邸の付近を歩くのと、伊藤屋本館に見えるのと」

「伊藤屋の本館には、なにをしにくるのですか」

「徳大寺公爵をたずねるようです」

「ほう」

品川巡査が身を乗り出すようにした。

「徳大寺公爵と碁を打つのです」

「さっきの二人連れですが、徳大寺公爵の名前をいって伊藤屋旅館をたずねた点が、気になります」

「……………」

「このことは、自分のほうで調べてみましょう。今後とも宜しくお願いします」